

英国ノッティンガムでの在外研究

人文学部准教授 本山 智 敬

2016年9月から1年間、イギリスはノッティンガムに在外研究員として滞在しました。家族は日本に残し、初めての一人暮らしで大変な面もありましたが、忘れることのできない本当に貴重な体験をさせていただきました。

ノッティンガム

ノッティンガムは人口約32万人の都市で、ちょうど久留米市の人口と同じくらいです。ロンドンから北に列車で1時間40分ほどの距離にあり、近くには岡崎選手が所属するサッカーチームがあるレスターもあります。イングランドのほぼ中央部に位置するため、イギリスの何処へ行くにも列車が便利で、エジンバラやバースなど、イギリス各地に旅行に出かけました。

ノッティンガム自体は特に観光で行くような街ではありません。有名なのはロビンフッドやイギリス最古のパブがあること、ポールスミスの生まれ故郷であること位でしょうか。程良く田舎ですが、立派なコンサートホールがあって国内外の有名なオーケ

ストラの演奏会が開かれたり、サッカーやアイスホッケーのクラブチームがあったり、ボブ・ディランやエド・シーランがツアーで訪れたり、文化的な楽しみにも事欠きませんでした。街の雰囲気は大きく違えども、田舎と都会のバランスが絶妙なところはちょうど福岡と似たものを感じる、とても生活しやすい街でした。

ノッティンガム大学

ノッティンガム大学は学生数33,000人（大学院生含む）ほどの総合大学です。メインキャンパスは広大かつ自然豊かで、隣接した大きな池の周りには一般の人たちもたくさん散歩に訪れていました。私が所属していた教育学部はその近くのジュビリーキャンパスにありました。在外研究員の受け入れ態勢が整っていて、研究員用の共同研究室には一人ずつパソコンとデスクが貸与され、快適な研究環境にありました。大抵の研究員は数ヶ月から半年で帰国しましたが、世界各地から集まった研究員仲間といつも励ましあいながら研究活動を行うことができました。



ノッティンガム市街



ノッティンガム大学ジュビリーキャンパス

大学での学びと研究生活

お世話になったデイビッド（David Murphy）先生は大学院の所属で、私も修士1年生の授業に1年間参加させていただきました。この大学院には Person-Centred Experiential Counselling and Psychotherapy Practice というコースがあり、まさに私の心理臨床のオリエンテーションであるパーソンセンタード・アプローチ（PCA）が学べる大学院でした。日本の大学院は、臨床心理士や公認心理師の資格認定のためにどこも同じようなカリキュラムになっていますが、この大学院ではそうした縛りのない独自のカリキュラムを実現させています。理論学習とスキル学習の授業がそれぞれ週に1コマ、4時間ずつ入っているのですが、講義形式ではなく、学生主体の話し合いによって進みます。学生も最初はさすがに戸惑っている様子でしたが、これがまさに PCA の学び方だと感じ始めてからは、先生の顔色を窺うことなく、積極的に学んでいました。ある時教室の壁に、誰が書いたのか次のような言葉が貼ってありました。「カウンセラーになることは、自分自身になることである。それはとてもシンプルであり、そして難しい。」カウンセラーになる上では、技法や理論を知的に学ぶだけでなく、自分の体験に落とし込んで初めて身についていくということでしょう。もう一つのスキル学習の授業では、学生は1年かけて何度もカウンセリングのロールプレイをしていました。15分ほどのセッションを毎回ビデオに録画し、セッション後にそれを見ながら、セラピスト役の学生は、この時に自分は何を考えながらこのような応答をしたのかということを丁寧に振り返っていました。日本でも同様の学びは以前から行われていましたが、PCAは「目の前にいるクライアントと今この瞬間にどうかかわっていくのか」ということを丁寧に考えていく心理療法であると改めて感じました。診断や技法の適応を中心に置きがちな昨今の心理療法において、このテーマは深く心に響きましたし、ここでもう一度基本に立ち返る思いがしました。一部の学生からはしばらくの間私も同じ学生だと思われていたらしく、おかげでとても仲良くなり、時々ホームパーティーもやりました。

英語が苦手な私も、この機会にデイビッド先生と共同で British Association for Counselling and Psycho-

therapy のリサーチ学会で、PCA の実践と研究の日英比較について発表しました。終わった後の達成感が違うからと、発表はほぼ私一人で行い、デイビッド先生は質疑でのサポートに回っていただきました。この研究を通して明らかになったのは、イギリスの方が PCA の実践家の数は多いものの、研究ベースで見た時に、日本もイギリスに劣らず研究が盛んに行われており、近年は PCA の理論を応用した実践と研究が増えているということでした。つまり、日本は実践家の数こそ少ないが、イギリスと比較してもまだまだ PCA の熱は冷めていないと言えます。発表のフロアには日本の臨床に関心のあるイギリス人が沢山来てくださり、私の拙い英語を熱心に心あたたく聞いて頂いたのも励みになりました。この1年間で PCA の研究者だけでなく、実践家の人たちとも知り合いになれたことは非常に大きな財産です。今後もお互いに交流を重ね、共に PCA の発展に向けて協力しあっていけたらと思っています。



デイビッド先生とパブにて

カウンセリングはコミュニケーションそのもの

私の英語の出来なさは先述の通りですが、それでも基本的なコミュニケーションは取ることができました。それは、イギリスで会った方々が私の話をちゃんと聴こうとしてくれたからです。特にデイビッド先生はカウンセリングのセンスがある方なので、私

の乏しい語彙から言わんとすることを想像し、私が聞き取りやすい言葉とスピードで伝え返してくださいました。するとどういことが起こるかという、私はあたかも英語が上手な人になったかのように、やり取りが自由でスムーズになるのです。まるで自分のことがうまく表現できないクライアントさんがカウンセリングの場で少しずつ語りやすくなるのと似ています。まさにカウンセリング技法は特別な場面だけではなく、日常のコミュニケーションにも通ずる方法なのだ、この一年間、身をもって体験しました。

日本から持参して便利だったもの

日本食を含め大抵のものはノッティングラムで手に入りましたが、日本から持って行って良かったものが幾つかあります。その一つはサランラップです。これは先に在外研究に行かれた先生の文章で読んでいたので持参リストに入れておいたのですが、やはり大正解でした。日本製のサランラップは海外のものとは比べ物にならないくらい上質でした。帰国前にイギリス人や在住の日本人の方にプレゼントした時も喜ばれました。

イギリスで一番重宝したものは、海外でも使えるデビットカードです。私が作ったのはソニーバンクのものですが、円口座以外にネット上に簡単にポンド口座やユーロ口座を作れます。そして為替相場のいい時にそれらの口座にお金を移しておくのです。すると、イギリスでそのカードを使うとポンド口座から、ユーロ圏で使うとユーロ口座から自動的に引かれ、その時々々の為替の動きに影響を受けません。私が滞在していた頃は、ブレグジットの関係で為替が大きく揺れ動いていたので、とても助かりました。また、デビットカードですので使うと口座から直接出金され、口座に動きがあるとすぐにメールで通知がきます。ですので、万が一不正などがあってもすぐに分かります。イギリスのほとんどの場所でカードが使えましたし、現金が必要な時は、あちこちにある ATM から安い手数料で引き出すことができました。イギリスで生活するにはイギリスの銀行口座がないと困るのではと思っていましたが、結局はこのカードと日頃から使っていた VISA カードの 2 枚で 1 年間過ごすことができました。

日本からのお土産で一番喜ばれたのは、日本の絵葉書と筆ペンです。これは日本でお世話になっている先生からのお饞別だったのですが、イギリスで出会った方に、綺麗な絵葉書に毛筆でその人の名前を漢字で書いてあげるので。合わせて漢字の意味を伝えたり、リサさんやエリさんには日本の女性の名前でもあると言うととても嬉しそうでした。また、日本から友人が遊びに来た時に茶道具を持ってきてもらったのですが、お茶をたててあげるとこれも喜んでもらえました。日本人が持つ美しいおもてなしの心を伝えるのに、お茶はとても役に立ちました。

さいごに

これまで実践と研究を続けてきた PCA を元に、私はこの先何をやっていきたいのか。40歳を迎える少し前からそのことを考え始め、それはとても苦しいものでした。コピーライターの糸井重里さんは、この時期の苦しみを「40歳問題」と呼んでいます。この時期に 1 年間もの時間をいただき、イギリスの PCA に触れ、仲間を得たことは本当にかげがえのない体験となりました。私の 40歳問題は帰国後の今も続いています、この 1 年間の体験を糧にこれからも何とかやっていこうと思っています。

イギリス滞在中は、正式なビザが 3 ヶ月ほど届かなかったり、住んでいたマンションの駐車場でボヤ騒ぎがあったりと、トラブルが全くなかったわけにはありませんが、それでも一度も病院にお世話になることなく、無事に 1 年間を過ごすことができました。これもひとえに教育・臨床心理学科の先生方をはじめ、人文学部の先生方や事務職員の皆様の支えによって実現したことだと、心から感謝しております。改めてこの場をお借りして深くお礼申し上げます。



スペインでの183日、スイスでの181日

理学部教授 上野勝美

平成28年度の1年間、長期在外研究員として表題に記した期間をヨーロッパの二か国で過ごしました。まずは、在外研究の機会を与えていただきました理学部および地球圏科学科の先生方、福岡大学の関係の方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

私の専門は地質学、古生物学で、特に有孔虫という顕微鏡サイズの小さな化石を研究対象としています。そこで、スペインではかれこれ30年近く研究を続けてきた古生代石炭紀（3.6～3億年前頃）とよばれる地質時代の有孔虫を、またスイスでは最近研究を始めたもう少し新しい地質時代（といってもまだ「何億年前」という時間スケールですが）である中生代三畳紀（2.5～2億年前頃）の有孔虫を研究テーマとして、在外研究の計画を立てました。

今回の在外研究は日本に家族を残しての「単身赴任」で、また私自身が滞在先の言葉であるスペイン語にもフランス語にも不慣れであったため、日々の生活からして「悪戦苦闘」の連続でしたが、研究の面でも、また外国で暮らすという点でも、非常に刺激的な1年を送ることができました。特に、普段はそうしたくてもできそうでできない「時間にとらわれず物事についてじっくりと深く考える」ということを満喫できた1年でした。滞在中に行った研究の成果も少しずつ論文としてかたちになってきましたが、ここでは研究の話は少し脇に置いて、滞在先の様子やそこでの生活、感じたことなどについて幾つか思いつくままに綴ってみたいと思います。

スペイン

スペインではオビエド大学地質学教室（Departamento de Geología, Universidad de Oviedo）の Elisa Villa 教授のところ滞在了しました。エリサさんは既に20年以上にわたって共同研究を行っている研究仲間で、これまでに論文も幾つか共同執筆しています。また

研究のことだけでなく普段からよくメールで「おしゃべり」をしている友人でもあります。彼女とは専門が同じであるということだけでなく、それ以外でも何となく「馬が合う」間柄でした。2017年8月で退官されるということを知っていたので、これは最後のチャンスと思い2016年4月～9月の半年間の滞在をお願いしたところ、快諾していただきました（エリサさんはその後、さらに2年間特任教授として大学に残ることが決まり、この小文執筆現在も現役で研究を続けています）。

オビエド大学はスペイン北部、アストゥリアス州の州都であるオビエド市に本部を置く総合大学です。創立は16世紀後半ということですから、400年以上の歴史があります。市内にあるキャンパスはいくつかの地区に分散していますが、私が滞在先の地質学科は市の中心に近いジャマキーケ・キャンパス（といっても、日本の大学のキャンパスと違い、その一面に大学の建物が建っているだけです）にありました。私は地質学教室全体が入った8階建ての建物の最上階に、「個室の」研究室を用意してもらいました。南に面した窓からはカンタブリア山脈とその前衛の山々が一望できる、眺望抜群の部屋でした。

オビエド市は人口22万人ほどの地方都市です。旧市街もあり、その中にオビエドのシンボルであるゴシック様式の大聖堂が聳えています。スペインというとマドリードなどの中央高地の乾燥した大地を想像されるかもしれませんが、スペイン北部に東西にのびるカンタブリア山脈北麓のアストゥリアス地方は、北のビスケー湾からの湿った気流の影響を受け、夏は比較的涼しく反対に冬は温暖な、降水の多い緑豊かな土地です（España Verde:「緑のスペイン」とよばれています）。私が滞在先の2016年の春～夏もよく雨が降りました。ただ基本的に霧雨（アストゥリアス語で「オルバーユ」とよばれています）

が主体で、強い雨が長く降り続くことは稀でした。むしろ、降ったと思ったらすぐに日が出て今度は太陽燦燦、よくまあこんなところと天気が変わるものだな、とあきれくらいでした。快晴だったので安心して洗濯物を干してちょっと外出したら、急な雨で「やられた！」ということが何度かありました。

外国での生活でまず第一に考えるのは「住処」の確保です。私の場合は条件に合った部屋が出発前にすぐに見つかりました。スペインでは2008年に住宅バブルがはじけ、今でも住宅供給過多な状況が続いているそうです。そのため、家具付きの手ごろな物件が数多く賃貸市場に出ていました。私が借りた部屋は市内の中心に近い、旧市街すぐ外側の建物の4階（日本式には5階）で、大学まで徒歩10分の便利な場所にありました。スペインらしく内装もおしゃれで、間取りとしても十分広いので、一人で住むにはもったいないところでした。夏休みに大学生と中学生の娘二人が10日間ほどスペインにやって来たのですが、「マジ〜？、福岡よりいいとこ住んでる！」と驚いていました。部屋の窓からは大聖堂の尖塔と教会の鐘楼、旧市街の赤茶色の屋根が広がっています。夜11時になると大聖堂のライトアップが消えるので、それを合図に就寝、という毎日でした。

スペインでの日常生活の中で一番印象に残ったのは、一日の時間サイクルです。「スペインタイム」と言ったらよいでしょうか。大学では皆さん、朝8時半頃から仕事を始めて、11時をまわったところで休憩をとり、カフェに集まってピンチョ（サンドイッチのような「つまみ」）とコーヒーで一服です。このピンチョですが、コーヒーのお供と言うには十分過ぎる大きさで（それも、全種類1ユーロでした）、私は毎回エリサさんと一つをシェアしていました。バゲットの上に1/8に切ったスパニッシュオムレツがのっているのが私のお気に入りでした。その後皆さん2時頃まで「朝」の仕事をして（この頃までがBuenos días＝おはようございます、です）、その後お昼を食べに一時帰宅、そのため大学の建物はほぼ「空っぽ」になります。そしてまた4時過ぎに研究室に戻って「午後」の仕事、という感じです。春から夏にかけてはサマータイムで夜10時過ぎまで明るいので、街中の通りも仕事を終えた後の8時をまわった

くらいが一番人出が多いようでした。「郷に入っては郷に従え」で、私も毎日昼はアパートまで昼食をとりに戻り、午後は7時半ごろに仕事を終える、という一日のサイクルでした。この長〜い昼休みが初めの頃は「これって効率悪いんじゃない？」と感じましたが、これが慣れてみると意外や意外、思いのほか「悪く」ない。その後スイスのジュネーブに移った6か月間も結局、スペインで染みついたこのライフスタイルを続けました。

スイス

スペインでの少々「ゆるり」とした生活に身も心もすっかり馴染んでしまい、少し後ろ髪を引かれる思いでスイス、ジュネーブに引っ越したのが、1年間の在外研究の丁度折り返しにあたる2016年9月30日でした。引っ越しといっても、研究試料（化石標本）は日本出発前にあらかじめスイスに送ってあったので、衣類や諸々の生活用品一式を飛行機の預け入れ荷物にしての欧州域内移動だけで済みました（あれこれ料理を作るのが好きなので、スペインで買ったキッチンウェアの類が思いのほか増え、結構な「大荷物」になってしまいました……）。

スイスでの滞在先は、ジュネーブ大学地球科学教室（Département des Sciences de la Terre, Université de Genève）の Rossana Martini 教授の研究室でした。ロッサーナさんはやはり有孔虫と地層を専門としていますが、主な研究対象は中生代三畳紀という時代です。「何とかの手習い」ではないですが、この時代の有孔虫の系統分類について少し「真面目に」勉強してみようと思い、彼女のところに在外研究の受け入れをお願いしました。ロッサーナさんとはこれまで国際学会などで度々一緒して、個人的によく見知った間柄でした。また、ジュネーブ大学地球科学教室にはもう一人、これまでに共同野外調査、研究を行ってきた Elias Samankassou 准教授がいました。彼は私と同年代で、20年以上前からの友人でもあります。ウクライナ東部のドネツ地域（今では紛争地域となり、残念ながら野外調査ができなくなってしまいました）で何度か共同の地質調査、研究を行ってきました。エリアスさんと彼のパートナーの Beate Fohrer さん（ウクライナではこの3人で共同研究を行いました）には、ジュネーブ滞在中、様々

な点でお世話になりっぱなしでした。

みなさんご存知のように、ジュネーブは多くの国連機関が本部を置く国際都市です。スイス最西部のジュネーブ州（カントン）の州都になります。なので、さぞ大都市なのかと思うかもしれませんが、ジュネーブ市自体の大きさは城南区とほぼ同じで（16平方キロメートルほど）、人口も城南区の1.5倍（約19万人）しかありません。そんなことを滞在の初め頃にエリアスさんと話していたら、「ジュネーブは『小都市』だよ。それにカントン（州）全体でも人口50万人もないからね。福岡の方がはるかに大都市だよ」と笑っていました。彼は一度、国際学会で福岡に来たことがあり、その時一緒に街中を見てまわったのでそれを覚えていたのでしょう。そんな国際「小」都市ジュネーブの教育機関の「顔」となるのがジュネーブ大学です。1559年に宗教改革の指導者ジャン・カルヴァン（Jean Calvin）により創設されたのですから、在外研究前半に滞在したオビエド大学よりさらに15年長い、450年以上の歴史があることになります。キャンパスはジュネーブ市内の数か所に分散しており、そのうち理学部は市の南部を流れるアルヴ川に沿って大きな（そして立派な）キャンパスと建物があります。ただ、理学系の中でも地球科学教室だけはなぜか、そこから少し離れたところにある普通のマンションを改装したビルの「間借り」がずっと続いています。この建物の中ですが、確かに研究室や実験室の区割りが理学部（というか大学）らしくなく、廊下や階段のつくりもいかにも普通の集合住宅を髣髴させる部分がありました。

地球科学教室のこの建物では大学院教育が主体であるため、学部教育について様子を見る機会はありませんでした。大学院生は50名以上在籍していました。地元のスイス人学生は意外と少なく（学部卒で良い就職先が見つかるからだという話を聞きました）、フランス、イタリア、スペインなどの周辺国からの大学院生が多い印象をもちました。また学外からの進学者が圧倒的に多いということでした。そのほか、中東、アフリカ、南米からの留学生もいました。教員数はおよそ50名で、ロッサーナさんはイタリア人、エリアスさんはカメルーン人という具合にその国籍も様々です。さらに技官や事務職員が約

10名いて、総勢110名ほどの大所帯の学科メンバーが、「普通のビルを改装」した少々手狭な建物に暮らしてると言ったら語弊があるでしょうか。50名ほどいる大学院生の何人かは指導教員の研究プロジェクトで雇用されてもいるようで、そのため教員の外部資金獲得に対するプレッシャーはかなり高いと感じました。ただ、地球科学のような基礎科学分野でもスイス連邦政府の科学研究ファンドが特段取りにくいというわけでは無いらしく、基礎科学へのサポートがうまくまわっている印象をもちました。

在外研究を終えて

スペインとスイス、それぞれの滞在先の方々に助けられて、1年間何のトラブルもなく帰国することができました。帰国直後のしばらくの間、とても不思議な感覚がありました。1年間も福岡を離れていた実感が全く湧かず、何だかいつものように1～2週間外国調査出張に出かけて、そこから帰ってきた時のように思えてなりませんでした。カレンダーの2016年3月をめくったら、いつの間にか一年飛び越して2017年4月になっていた感じです。はじめにも書きましたが、見るもの聞くもの、毎日が本当に刺激的な1年間で、恐らくその所為なのでしょう、今までで最も短く感じられた1年でもありました。在外研究ということで振り返ってみると、当初予定していた化石試料の検討をスペインでもスイスでも概ね実施できたので、その点ではまずまず「合格点」だったのではないかと考えています。



米国ペンシルベニア州立大学での在外研究

理学部助教 小 隈 龍一郎

2016年9月より1年間、アメリカペンシルベニア州ステートカレッジにあるペンシルベニア州立大学で、在外研究を行いました。ほぼ半年経った今でも、当時のことがよく思い出され、在籍した研究室やタウン誌のホームページ等にアクセスして様子を垣間見えています。本稿では、街や大学の様子、研究、そこでの生活について、簡単ですが、お伝えしたいと思います。

ステートカレッジ

ニューヨークから西に300kmほどのところに位置しています。市中心部の人口は、市民が4万程度、大学関係者や学生まで合わせても10万程度の小さな街です。一番の繁華街も、こじんまりとして、落ち着いた雰囲気を感じさせています。州のペンシルベニアという名前は、「Penn という人の森 (Sylvania)」から来ているようですが、ステートカレッジもその例に漏れず、緑豊かな街並みを誇っています。自然が溢れていて、年中野生のリスが木々や芝生の上で走りまわり、春には野うさぎが大学構内や家の軒先に頻りに現れます。初夏の夜には、蛍が住宅街を飛び交っていました。治安は極めて良く、全米の都市



ステートカレッジの繁華街の一角にて

の中でも犯罪率はかなり低い方です。

ペンシルベニア州立大学

1855年に農業大学として設立され、その後、総合大学となりました。工学や理学の分野は有名で、高い研究水準を誇っています。学生数は約10万、職員の数はおよそ5万です。州に分散するいくつかのキャンパスのうち、ユニバーシティパークと呼ばれるステートカレッジのキャンパスに、その半数が集まっています。キャンパス内の建物は、下の写真にあるような重厚で古めかしい建物と、モダンで洒落たデザインのもので混在し、この大学の伝統と勢いを感じさせます。



学長室のある建物

研究

私が所属したのは材料科学工学科でしたが、実際には、全学的な組織である材料研究機関 (Material Research Institute) で研究を行いました。ここには、15の学科からの教員のほか、200名以上の専属職員、100名の研究者、800名以上の大学院生が集結しています。機関のある建物は2012年に作られた新しいもので、庭やエントランスには日本のテイストが盛り込



材料研究機関のある建物

まれ、なになつかしい雰囲気がありました。

研究室では、Phase-Field 法や DFT 法、熱力学的解析などの手段を使って、理論的な側面から、強誘電体や強磁性体の薄膜、チタンアルミニウム合金、ニッケル合金に関して、組織構造の形成過程を解析していました。当然、計算機シミュレーションは必須で、計算用のパッケージソフトの開発も行っています。私の研究テーマは、これまでの二元合金の規則化に関する Phase-Field 法を基にした定式化に、格子歪みの効果を取り入れることでした。格子歪みの効果は、主に、弾性エネルギーと界面エネルギーの対称性変化に影響します。研究室の筆頭である Long-Qing Chen 先生は、弾性エネルギー効果を取り入れた Phase-Field 法の解析では、20年ほど前から世界的に有名で、私が先生の研究室に滞在を希望した大きな理由の一つです。先生は物理的直感と数学的な取り扱いに長けているのですが、人柄は気さくで心遣いが細やかです。超多忙にもかかわらず、滞在して4ヶ月ぐらいから、1か月に1度の割合でマンツーマンのディスカッションをやっていただいただけでなく、私の居室には、シニアソシエートと同格のゆったりとした二人部屋を充てていただきました。事務的な手続きや生活面においても、素早く親身な対応を取っていただき、いくら感謝しても仕切れないほどです。

先生は、中国の大学で特別講義や講演を頻繁にされており、研究室には、その縁で多くの中国の人が集まってきます。メンバー20数名のうち、中国系以外の人は私を含めて二人だけでした。週一回開かれる研究室のセミナーでは、リサーチアソシエイトやポストドック、大学院生が、過去二週間分の成果を（もちろん、英語で）発表するのですが、その報告は内容豊富で非常に驚かされました。発表後のディスカッションに関しても、まだ20代後半のリサー

チアソシエイトの人が進行役を務め、その見識は見事なものでした。私も、何度かそのセミナーで過去の研究成果やその時の研究の進行状況などを話し、有益な助言を得ることができました。

彼ら中国人のコミュニティは、助け合いの精神が高く、私に対しても、研究や生活面で困ったことはないかと、常に声をかけてくれました。実際に相談した場合は、親身になって最後まで対応してくれます。メンバーの平均年齢は20代後半と極めて若いですが、人間的にも素晴らしく、この研究室に所属して良かったと考えています。このような素晴らしい環境のもと、一年間じっくりと研究テーマに時間をかけることができました。おかげで、目標をほぼ達成しただけでなく、これからの研究の礎を固めることができました。

生活

ステートカレッジは四方を小高い山に囲まれた盆地です。空気は乾燥しているのですが、夏は暑く最高気温が30度以上にもなり、冬は最低気温がマイナス20度近くにも下がります。積雪は、年数回、数十センチほどです。台風や竜巻はほとんど襲ってこないため、地元の人はハッピーバレーと呼んでいます。1日や週の間の変化する天候は極めて早いものでした。1日の気温差が20度近く、週の最高気温の差が10度以上にもなり、最後まで慣れることができませんでした。年間で最も過ごしやすかったのは、9月中旬から10月下旬までと、3月下旬から7月初旬までのあたりです。秋の時期は紅葉が素晴らしく、街路樹が一斉に赤や黄色の彩りを呈し、歩道もその色の絨毯で埋まります。春から夏にかけての時期は、様々な草木が花を咲かせます。春には八重桜の類があちこちに見られ、初夏に大学の植物園に出かけると、可憐で珍しい草花を数多く見ることができました。

研究室や大学、町のイベントも、楽しむことができました。Long-Qing Chen 先生のお宅に呼ばれたサンクスギビングデーのパーティでは、研究室のメンバー以外の方ともいろいろと話すことができ、楽しい時間を過ごせました。もっとも、カラオケで日本語字幕の出るテレサテンの曲を唄わされたのには、少々参りましたが。大学では、学期期間中に、Bach's

Lunch と銘打った一般向けの無料の音楽会が、週一回の割合で開催されていました。一時間ほどの間、主に音楽カレッジの学生さんが、演奏や唄を大学内の教会で披露します。プロではないので、あまり上手とは言えないのですが、最後に近づくにつれて発表者がうまくなるようにプログラムが組んであり、終わった時にはそこそこの満足感が残ります。また、音楽カレッジでは、学期末の実技試験も一般公開されていて、何度か聞くことができました。音楽家を目指す学生さんにとっても、コンサート形式で試験を受けることは、いいモチベーションになるのではないのでしょうか。7月の初めの週には、ステートカレッジでアートフェスティバルが催されます。車両通行止にした街の道路や大学内の道路の脇に小さなテントが延々と並び、中では、アマチュアからプロまでが自分の芸術作品を展示販売します。そこで作品について話しかけると、みんな本当に楽しく熱心に答えてくれました。備前焼風の陶器を展示していた人と話すうちに、その方が福岡や伊万里、有田にも来たことがあるとわかって、驚くとともに、すごく親しみを感じたものでした。

日々の生活に関してですが、住居には戸惑いの連続でした。アメリカの家は、外壁は厚いのですが、天井や床板が薄く、上下の音が丸聞こえになります。最初に住んだアパートは、下の住人が夜から明け方まで騒ぐので、4ヶ月も経たないうちに一軒家に引っ越しました。こちらでは、キッチンの使い勝手があまり良くなく、妻は苦勞していたようです。一方、食材に関しては、素晴らしいものを手に入れることができました。アメリカには、農務省がお墨付きを



アートフェスティバルにて

与えるオーガニック食品の認証制度があります。これらの食品を買っておけば、まず間違いありません。値段も、日本のものと比べてそう高くなく、店によっては品揃えも豊富です。買い出しに通っていたスーパーでは、味噌や豆腐、アイスクリームやチョコレートまで揃えてありました。あの頃食べていた牛やラムのステーキ、サラダや鳥のスープの味が忘れられません。

おわりに

ステートカレッジでは、日本の方が少なく、概ね交渉ごとは一人でやっていました。英語力が向上したかどうかは怪しいのですが、コミュニケーションを図ろうとする度胸が、少しはついたような気がします。街の方々は極めてフレンドリーで、知り合いでなくても、遠くから挨拶をしてくれます。家の斜め前に住んでいた女性は、その方が手入れされている日本風の庭について私が尋ねたことがきっかけで、親しく接してくださいました。お別れの挨拶をしに行った日には、「あなたたちのステートカレッジでの最後の思い出が、素敵なものになりますように」と、妻ともども夕食をご馳走してくださいました。他にも、ご近所でいつも話しかけていただいた方や、Long-Qing Chen 先生の奥様等、素晴らしい人達と交流することができ、貴重な経験となりました。

このように、直接感じる事ができたアメリカの文化や社会を、今後は、研究だけでなく、いろいろな場面で生かしていきたいと考えています。素晴らしい機会を与えてくださった皆様、研究期間中支援してくださった皆様、本当にありがとうございました。最後に、慣れない海外生活で奮闘しながらも私を支えてくれた妻に深く感謝します。



同济大学での在外研究について

工学部教授 趙 翔

在外研究の行き先をどこにしようか。工学部に申請を提出する前に、さまざまな関連情報を探していた。欧米の有名大学に行く考えはずっとあったが、インターネットで見つけた世界の大学専門分野ランキングの情報に関心を持つようになり、自分の固定観念が変わった。私は世界の大学ランキングに特に関心を持つことがなかった。そのランキングは総合的な評価で、一部の専門分野と大きくかけ離れるなど、盲点も多いと思っていた。しかし大学専門分野のランキングは少し違うもので、かなりの的を射ている。QS2016 建築/建築環境専門分野ランキング (QS World University Rankings by Subject 2016-Architecture /Built Environment) の中で、中国の同济大学は22位にランクインされている。同じランキングの23位は、学生時代に先生たちがよく取り上げていたアメリカの建築学名門のスタンフォード大学である。この情報は、同济大学に行ってみようという好奇心を引き立ててくれた。ちなみに、東京大学のランキングは13位だった。2017年のランキングで、同济大学は順位を二つあげて20位にランクインした。同济大学に知り合いが複数おり、スムーズに連絡することができたため、行き先を同济大学に決めた。一つの大学が世界範囲の専門分野ランキングに上位を占めることができたのは、多くの要因があると思うが、同济大学の場合は次の要因があると考えられる。

同济大学建築と計画学院（以下建規学院と略す）の歴史は60年あまりとそれほど長くないが、4つの特徴がある。1）専門性の高い教員陣、2）多角的な人材教育と充実した教育空間、3）教育、研究と設計実践の連動、4）開放的な態度でグローバル化に積極的に対応し、国際交流と協力に取り組むこと。同時に、以上の4つの目標を実現させるため、教育、研究をサポートする関連部門も無視できない内容である。

○専門性の高い教員陣

建規学院は1986年に設立された。現在は建築、都市計画、景観という三つの学科を設けている。1952年に設立された建築学科はいまの建規学院の前身である。2016年に専任教員と研究員は230人おり（うち外国籍教員16人含む）、専任職員は60人いる。うち教授88人、副（準）教授82人。高等研究院の専任研究スタッフは11名。その他に兼任教員と研究員は219人（うち外国籍教員115人含む）。内訳をみると、建築学科の専任教員は139人（教授41人、副（準）教授56人、その他42人）、都市計画学科の専任教員は47人（教授18人、副（準）教授14人、講師15人）、景観学科の専任教員は22人（教授7人、副（準）教授6人、講師9人）である。

○多角的な人材教育と充実した教育空間

建規学院には多くの専攻が設置されており、中国大陸の同様な大学の中で、学部と大学院の両方とも募集人数の規模が最大の学院でもある。111の専門科目が設けられているが、必修科目は10科目しかない。1952年に建築学専攻が設置されてから、都市計画（1955年）、風景園林（1979年）、歴史建築保護工事（2003年）などの専攻が相次ぎ設置された。

1977年に建築学科しかなく、建築学クラス（毎年2クラス、各クラスの学生数は30人）と都市計画クラス（毎年2クラス、各クラスの学生数は30人）に分けられ、5,050平米の独立した教育・研究棟を使用していた。1979年に定員30人の風景園林クラスが加えられ、当時は約600～700人の学生が在学していた。1986年に建規学院が設立され、新たに9,050平米の建物が建てられた。2010年、古いほうの建物を建規学院基礎教育棟に改築された。2016年末までに、学院の建築群総面積が3万平米に達し、学部生1,192人、大学院修士課程995人、博士課程403人、修士課程及

び交換留学生644人の計3,234人の学生たちがその中で勉強し仕事している。国際学術公開講座は年間120～150回開催されている。

○教育、研究と設計実践の連動

2000年代に入ってから、建規学院は「エコ都市」、「グリーン建築」、「遺産保護」と「デジタルデザイン」を学科の新たな発展重点に据え、もとの基礎の上でさらに新しい強みを持つ学科を形成させ、学科間を連携するプラットフォームを通じて新しい優位性を持つ学科群を作り出してきた。「教育部高密度人間居住環境生態と省エネ重点実験室」を作り、スマートシティ、建築技術、歴史建築保護技術、デジタルデザイン建造などの分野で多くの成果を収めてきた。また、「エコ都市設計国際共同実験室」、「建成環境技術センター」などを設立し、比較的を整えた学科建設を行い、専攻群全体が発展する優位性を保ってきた。

建築学科の教育、研究と設計実践の連動を強化するために、1994年以来、建規学院は上海同济都市計画設計研究院、同济大学建築設計研究院（グループ）会社都市建設研究院を設立した。今は500人あまりのスタッフが働いている。

○国際協力と社会向けサービス

建規学院の国際協力にも特徴がある。「国連ユニセフアジア太平洋地域世界遺産トレーニングとリサーチセンター（上海センター）（World Heritage Institute of Training and Research for the Asia and the Pacific Region under the auspices of UNESCO, Shanghai

Center）」、「アジア開発銀行—同济大学都市知識センター（Asian Development Bank-Tongji University Urban Knowledge Hub）」、そして国家レベル「未来都市と建築111人工知能導入基地（National 111 Base of Introducing Talents for Future City and Architecture）」などを設立し、国連ハビタットとの提携を積極的に展開してきた。建規学院と海外100以上の大学と提携関係があり、そのうちの30校以上と実質的な協力関係を結び、17の大学と一緒にダブルディグリープロジェクトを行っている。うち学部レベルが一つ、大学院レベルが16ある。

○教育、研究をサポートする関連部門（Facilities）

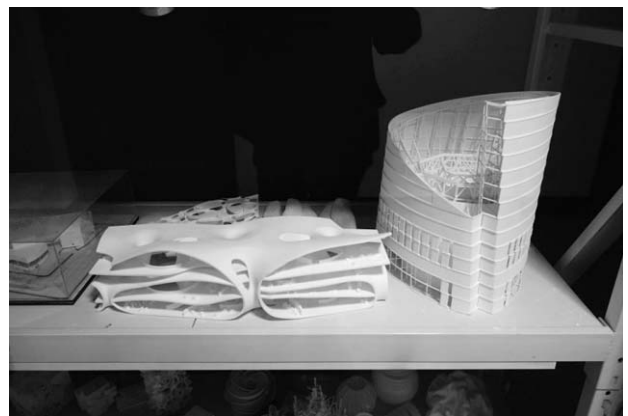
建規学院の教育、研究スペースが充実しており、先進的な設備がある実験室、基地、センターがたくさんある。以下はその代表的な事例である。

- 教育部高密度人間居住環境生態と省エネ重点実験室（Key Lab of Ecology and Energy Saving in High-density Human Settlements）
- 都市計画と現代技術実験室（National Lab of Modern Technology in Urban Planning and Design）
- 建築技術実験室（Lab of Building Technologies）
- デジタル化計画と設計学部専門実験室（Student Lab of Digital Planning and Design）
- 教育創造基地（10のサブ基地）（Student Creative Basis Network）
- 情報センター（図書館、デジタルデータ館、学院歴史館）（Information Center（College Library, College Achieves Centre, College Museum））

福岡大学は新しいものづくり工房を建設している



（在籍していた研究室が入っている建物 HP から）



（レーザープリンターで出力された学生の設計作品 趙撮影）

ため、ここで教育部高密度人間居住環境生態と省エネ重点実験室について少し詳しく紹介していく。この実験室は約2千平米の空間と専任の実験スタッフを持っている。その主な部門であるデジタルデザイン研究センターには、ロボット実験室、CNC 建造実験室、デジタルプリンター実験室、クラウド計算センター、デジタルエコ表層実験室、情報シミュレーションと集成実験室、シミュレーションと可視化実験室などが含まれている。そのうち、物体の造形あるいは成型用の設備だけでも以下のようにあげられる。

- Robotic Manipulator + Water-jet Cutting Machine
- CNC Machine Tool
- EOSINT P395 A highly productive thermoplastics laser-sintering system
- 3D printer
- Laser Cutting Machine
- 5 Axis CNC Milling

これほどの機材設備が揃っている実験室は、欧米ではスチュアート大学 ICD (Institute for Computational Design and Construction)、チューリッヒ工科大学 (ETH) The Block Research Group (BRG)、Gramazio Kohler Research、マサチューセッツ工科大学 (MIT) the self-assembly lab、Media Lab、Glass Lab、ミシガン大学の Digital Fabrication Lab (FABLab) at Taubman College、ペンシルベニア大 “Kokkugia” Architectural Association, Design Research Lab (AADRL)、ハーバード大学 Fabrication Lab しかない。中国国内でも、清華大学「建築シミュレーションとコンピュータ補助設計実験室」、「建築材料と工芸実験室」、「LCD パラ

メーター設計研究センター」などの数か所に限られている。もちろん、同済大学建規学院にも建築専攻建築基礎教育研究室に属する建築模型制作室を持っている。

このように日常的な教育、研究をサポートする実験（ものづくり）も、先端的な教育、研究をサポートする実験（先端的なものづくり）もあるような実験室空間配置法は、学生の創造的学習だけではなく、教職員の創造的研究をサポートする基礎条件をもたらすことができる。

最後に、今回の研究を暖かく受け入れてくれた同済大学の支文軍教授、在外研究をサポートしてくださった福岡大学、そして在外研究期間中に私の仕事を分担してくださった建築学科の同僚の皆さまに、心より感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。



(5 Axis CNC Milling 趙撮影)



韓国高麗大学での長期在外研究

医学部看護学科講師 有田久美

私は、2017年4月2日から6か月間、長期在外研究の機会を与えられ、韓国ソウル市にある高麗大学（Korea University）で在外研究の日々を過ごした。

ソウル市は、韓半島の中央に位置し、人口の5分の1、1千万人の人が住むグローバル都市である。インフラの整備が進み訪問するたびに街並みは変化、街の明かりは煌々ととり、24時間眠らないエネルギーギッシュな街でもある。福岡からはわずか2時間と近い国であるが、日韓関係の歴史を考えると近くて遠い国のイメージはぬぐえない。奇しくも渡航後すぐに北朝鮮によるミサイル発射が始まり、滞在中も繰り返し発射が続き、日本国内にいるときは遠い出来事であった国際問題も、否が応でも考えるきっかけとなった。

今回の研修先、高麗大学（韓国読みコウリョダイガク）は英語表記 Korea University であり、高麗を語源とした呼び名である。1905年創立の私立大学であり、韓国の中では入学難関3大大学、SKY（Seoul National University, Korea University, Yonsei University）のひとつと呼ばれ、著名人を数多く輩出している。2003年からは、Global KU プロジェクトとして、世界トップ100の大学に入ることを目標としている。現在、「Global KU Frontier Spirit」のスローガンを掲げ、海外大学との交流の強化、英語教育の拡充、外国人教授採用の拡大などグローバル化に向けた改革を推し進めており、2017年度のQS世界ランキングは、第90位であった。

キャンパスは、ソウルの中心部から地下鉄で20分程度の位置にあり、石造りの建物を基調とした美しく広大なオールインワンキャンパスである。22学部、23大学院を擁し、約4万人の学生が学び、2つの大学病院を持っている。福岡大学の3～4倍はあるで

あろうキャンパスの広さであった。



写真1：高麗大学メインキャンパス

今回の私の研究課題は、「日本と韓国における老年看護の比較」である。高齢化率はまだ13.4%と低い韓国であるが、高齢化のスピードが世界一速く、社会制度的にも文化的にも類似点の多い韓国と日本の現状の比較から日本の老年看護についての示唆を得たいと考えたからである。高麗大学での指導教授は、看護学部地域看護学教室、Ryu Hosihn 教授であり、過去に日韓の在宅看護について、数本共同研究させていただいたご縁で、在外研究員として快く受け入れて頂いた。Ryu 教授は韓国地域看護研究についての第一人者であり、特に家庭看護については、現在の上級実践看護師の前身である家庭専門看護師を大学教育に導入した先駆者でもある。Ryu 教授は、非常に多忙な方であるにもかかわらず、韓国の看護制度や動向、また見学先の調整や、研究についての考え方など、熱心に指導していただいた。特に、私の机が教授の部屋の一部にあったこともあり、教員同士のやり取りや、講義の準備、院生への直接の指導や、学部生へのかかわりなど、直接見て感じる機会が多く大変学ぶことも多かった。

韓国人は、会食が好きで、食後には必ずコーヒーを飲む。実は、かのスターバックスの店舗数も世界で一番多いのが韓国である。おしゃれなカフェも多く、キャンパス内を歩く学生は片手に必ずコーヒーのカップを持っていた。私もよくランチに誘っていただき、学食や大学を出て学生街で食事をした。幸い、韓国料理は私の口によく合っていたので、滞在中日本食を食べたいと思ったことは一度もなかった。食事の後は定番のカフェタイムがあり、看護事情以外にも韓国の生活の話や美容やファッション、韓国ドラマなどの話で盛り上がった。また、Ryu 教授からは、時々自宅にご招待して頂き、週末には近郊のドライブやハイキングなどにもご夫婦で誘ってくださった。私にとって韓国の文化や生活に触れる良い機会であり、先生の優しさとその体験は生涯忘れられない思い出となった。



写真2：高麗大学地域看護学教室教員と
(左から著者、Ryu 教授)

研修中は、研究活動以外に病院、施設、保健所等の施設見学や諸会議の同行、講義の聴講、大学院での直接指導などを体験した。また、私自身も大学院で、「日本の高齢者看護について」のタイトルで講義を行った。終了後に質問もあり、興味を持って聴いていただけたと感じた。

韓国の看護の大きな特徴は、看護の高等教育の充実である。戦後アメリカの看護教育制度の影響から、大学、修士博士課程の設置など日本よりかなり早期に取り入れ、現在、看護師教育は全て大学教育となっている。また、看護師免許取得後に経験と教育

や試験など一定の要件を満たし、高い専門性と優れた看護実践能力をもつ看護職者、すなわち上級実践看護師も韓国では早期に教育制度が整い、日本の上級実践看護師数と比べると全領域で約4倍の登録者がいる。ただし、高齢化に関しては、そのスピードの速さに危惧しているものの、まだ高齢化率は10%台であり、大学教育の中での老年看護は、昨年選択科目から必修科目へ変更されたばかりである。しかし、大学院教育は2004年から老年看護上級実践看護師の教育が始まっており、上級実践看護師の中でも老年看護の登録者数が一番多くその活躍が今後期待されている。その他、家庭上級実践看護師は大学病院などの比較的大きな病院に所属する訪問看護師である。自分の所属する病院の入院患者を家庭で看るというスタンスであり、入院期間短縮への効果も実際にある。韓国には往診医制度がないという特徴もあり、看護師に処方権はないものの、自立した存在として、上級実践看護師が活躍していることが感じとれた。



写真3：大学院での講義

住居は、キャンパス内の寮を利用した。寮だけでもたくさんのビル群があり、ファカルティー用と留学生用に居室は分けられていた。比較的リーズナブルな値段であり、施設やセキュリティーは整っており、快適な生活を送ることができた。寮に住む留学生は、中国人の多さは感じたが、全世界中から留学しており、韓国人気の高さを実感した。

寮は小高い山の中腹にあり、最寄りの地下鉄まで

は長い坂を使用しなければならなかったため、バスに一人で乗れることを韓国での挑戦のひとつと自分に課した。バスの表記とアナウンスが全てハングルであり、最初は間違えたり乗り過ぎたりしたが、時間の経過とともに理解できるようになり、研修の最後のあたりはソウル市内であれば、バスを使用して移動できるようになった。韓国は交通費が安価であるのが特徴であり、地下鉄とバスの両方を使うとバス代は無料になるなど生活する上で大変助かった。ひとつ驚いたのがバスの運転の荒いことである。韓国の場合、バス停に停車後、席から立ち上がって降りようとする、タイムアウトで容赦なくドアが閉まりさっさと出発してしまう。何度か同じ失敗を繰り返し、降車時はドアの前で待ち構えて降りるようになった。これについて Ryu 教授から「韓国はまだ高齢者が少ないので、高齢者に配慮するような運転手の心使いもない。私は逆に日本に行って、バスの運転手から立ち上がったことを何度も注意されて驚いた。近い将来高齢化が進むと、転倒防止の観点から韓国も日本と同じように注意していかなければならない文化が生まれてくると思う。」とおっしゃった。確かに、バスや地下鉄に乗っても、日本に比べて高齢者ははるかに少ないと日本の高齢社会の実際を痛感した。

今回、看護学科で初めての長期在外研修に行かせていただいた。関係者、教員の皆様にご場をお借りして心からお礼を申し上げたい。私にとって、はじめての海外居住経験であり、生活に慣れるまでは本当に大変だった。ビザの取得のために苦労したことや、ハングルが読めず電化製品が使いなかつたり、銀行の通帳を作るのに3回も出直したり、数えきれないエピソードがあるが、今となっては良い思い出である。6カ月という時間はあっという間に過ぎ、生活に慣れた頃に帰国となり、もう少し滞在したかったのが正直な気持ちである。在外研究に行くということは、多様な価値観に触れ、違うものの見方を体験したり、自分自身の小ささに気づいたり、日本には経験できないことばかりである。今後、今回の学びを教育や研究に生かしていきたい。



英語やろうよ、みんなで。

商学部准教授 太 宰 潮

このレポートでは、太宰の在外研究の様子と共に、下記3つのイタイコトをお伝えすることを目的とします。

- ① 国際的な競争は激しく、その分野をリードする方は年齢・ポジションに関係なく常にその競争の最前線に出ていること
- ② 引用数という研究者の評価の本質を目指して、英語力と研究面の国際交流の底上げを個人・組織として本気で図るべきであること
- ③ 海外業績が評価に加えるように組織を変えていかななくては抜本的な改革はできないこと

既に優れた実績を多く残されている先生からしたら一笑に付す内容かとは思いますが、何かを感じて頂けたらと思います。

2016年9月から1年間の在外研究期間、米国はミズーリ州、University of Missouri-Kansas City (UMKC)にお世話になりました。個人的な研究資金獲得や英語論文の投稿、海外学会での発表といった成果なども残せまして、非常に有意義な1年間を過ごさせて頂きました。受け入れて頂く大学探しから、ビザ申請、異国での生活立ち上げと家族4人での現地ドタバタ暮らしの様子などを面白く記すこともひとつかもしれませんが、やはり本業である研究面に重きを置いてレポートをしたいと思います。

いつも場所を聞かれる Kansas City は、Missouri 州と Kansas 州の双方にまたがる街で、米国のど真ん中にあることから「Heart of America」とも言われます。おそらく在外研究では、米国であれば東西海岸沿いに行かれる方が多い中、場所としては珍しいところだと思います。そこで、大学院を中心に講義に週12時間ほど、

それ以外にも様々なプレゼンテーションであったりディスカッションやイベントの場であったりにとっても多く同席をさせて頂きましたし、現地の先生方とお話ができる機会もとても多く頂きました。放置されることもしばしばあると聞く在外研究の中では、基礎力を付けるこれ以上ない、貴重な、恵まれた環境でした。それを十分に生かされたかどうかはまた別問題なのですが…

他の先生方にとっては常識ではあったのですが、非常にお恥ずかしい正直なところを言いますと、米国を中心とするアカデミック界の競争状況を、この博士課程や毎日の研究生活の中で知るに至り、今後の研究者生活の観点も大きく変わることとなりましたので、その点に焦点を当てたいと思います。

今更ながらに知った内容は、次のようなことです。
①大学教員として採用を目指すには、よりランクの高いジャーナルに論文を掲載することが何よりも重視され、博士課程からそれを目指して様々なトレーニングや機会を経験していること。
② Tenure Trackなどの制度の中、よりレベルの高い大学での定職を求めて競争をしていること。
③定職に就いたとしても論文や引用数などの実績でシビアに評価され、それが無い者にはそれ相応の評価・待遇があること。
④逆に現地で名を馳せ、活躍している先生方は、年齢がおいくつだろうが、ポジションが教授であろうがなかろうが、常にジャーナルに投稿し、reject されても当然であるという最前線で戦っていること、等。

特に、著名な先生であっても、普通に reject を語っておられた姿、論文業績=紀要などではなく、よりランクの高いジャーナルにいかにか論文が掲載されるかによって、待遇や日々の業務がダイナミックに変わり、より良い業績を残せた人はより研究がしやす

い環境となっていく様子に、日本と大きな乖離を感じました。しっかりしたジャーナルに論文が載っても特に待遇も何も変わらない日本の様子的一端を説明すると、「じゃあ論文を書くモチベーションは何？」と問われ、「純粋な Curiosity だけでしょうか」と雑談したことなども、良い思い出かもしれません。まずは英語で、とりあえずトライしやすい身近な海外学会発表と英文ジャーナルへの投稿から勝負してみよう、というのも、言ってみればとりあえず何かの県大会予選に出てみよう、というレベルであり、その先には全国大会があり、その先にさらにプロがあり、その先にはメジャーリーグのような全世界最高峰のレベルがある、ということを知ったのです。

米国は給与格差が日本より大きく、能力や実績があればお金をより多くもらえ、より良い環境で仕事ができるようになりますが、アカデミック界でも例外ではない、ということです。なんでもドライに判断され、競争があり、淘汰もなされることに弊害もあるとは思いますが、一方の日本は良くも悪くも差が生まれにくい状況にあります。こうした研究者の競争の様子や暮らしを肌身感覚で知れたのが、まず大きなことでしたし、これがイイタイコトの1点目です。

次いで、問題となる英語力です。正直言って、私の英語力は恥ずかしいレベルです。英文執筆は何回校正をしても真っ赤になって返ってきてしまいますし、詳しい議論になるとついていけなくなりますし、速い英語はなかなか聞き取れません。現地のコミュニティカレッジに通うなどして何とか底上げも図り、なんとか先生方との研究の議論や企業の方へのヒアリングなどは最低限こなせるようになった（…というよりは、恥ずかしさを気にせず勢いでなんとか押し切ってしまうようになった）というレベルです。

財務省の教育・研究政策のキーマンであるとされる方が、現在の研究の問題点として、大学の封建制・閉鎖性を指摘するとともに「国際交流・国際共著論文が弱いので論文被引用が劣る」（参照：週刊東洋経済2018.2.10）と指摘していますが、その通りかと思えます。そして、深い交流をするには、やはり英語や他言語を高いレベルで操る力が必要です。

本学が現在様々な工夫をやっていることも知って

いますし、利用もさせてもらっています（e.g., UNOでの研修など）。しかし、抜本的な改善には至っていないと感じる次第です。そこでまずイイタイコトの2点目ですが、英語力・研究面での国際交流の底上げ、です。まずはこうした状況を機会と捉えることから始まります。中堅・マンモス大学で、「研究」という大学の本質にメスを入れているところはそうはありませんから、今のうちに、他大に先んじて、本腰を入れるのです。希望者のみの外部語学研修の利用でも、Skype 英会話の利用でも、IELTS や TOEFL などのスコアに目標を設けてそれを取りに行くでも、何でもいいでしょう。教員の英語力を長期間で高める施策を打ち、さらに実績として海外学会報告数と論文投稿&掲載数を発信し続けるのです。また、本学ならではの、福岡ならではの、という視点を付け加えるのならば、東南アジアの大学との連携を図り、レベルの高い大学からの在外研究を積極的に受け入れる、といったことも考えられます。（個人的にはこれがイイ案なんじゃないか、と思っておりますが…）

さらりと書きましたが、「研究」が大学の本質のひとつであり、学部教育・大学院教育においてもそこがもっと重視されるべきである点、引用数が我々研究者の評価の本質のひとつだという認識が弱い点も、問題の根底のひとつではないかと思う次第です。

最後に、イイタイコトの3つ目です。人事評価に、海外業績を加味してはどうか、という点です。減点法よりは、加点法のほうがよいかと思いますが、給与・昇進・担当コマ数・諸々の学内業務などに、インセンティブを設けるのです。当然、米国中心のアカデミズムが絶対でそのシステムに必ず乗るべきだとか、国内業績に意味がないとか、英語でないと研究でないとか、変な意見を言いたいわけではありません。しかし一方で、積極的に海外業績が国内で考慮されることは、あまり聞いたことがないのもまた事実かと思えます。であれば、中堅大学・マンモス大学である本学がそれを積極的に、率先して、取り入れてしまうのです。ただ形骸的な海外での学会発表をする人もいるかもしれないので、審査方法も、外部評価ランクや中長期的な引用実績など、様々なことを考慮する必要があるでしょう。

既に議論がなされたこともあるはずです。いきなり全学共通の大ナタを振るうことも難しいでしょう。担当コマ数や昇進などは、一朝一夕に変えられないでしょう。しかし、影響は少なく、且つ良い方向に変えられる点も必ずあるはずです。それに呼応する研究者も、また必ずいるはずです。全学レベル、学部レベル、研究推進部など、組織単位で工夫してできることもあるはずです。

このレポートを読み、何かを感じて頂き、そして実際に組織をより良い方向に無理せずシフトさせていくような行動を、ぜひひとりでも人数の多い職員で起こしていきたいです。それが、長期的な大学の真の強さ、ひいては国力への貢献につながるからです。福大生は元気を取り柄、と言われることがありますが、研究面でも、トップレベルの大学にはない、ウチらしい元気を、出していきたいと強く願う次第です。



how should we be preparing our youth for their future work life ?

The way forward is unclear given the rapid rate of change, and consequent unpredictability, of the work environment. Technological changes are having a profound effect on established fields of work such as medicine, law and logistics, to mention but a few, with little understanding of what or how these extant labour markets may be replaced. Suffice to say, adaptability, versatility, the ability to multi-skill and scaffold existing experience to bridge disciplines and accommodate new circumstances will be of value to new graduates. Life-long learning also looks to be an inevitable consequence of a mutable future.

The University of Tampere is one of two universities located in the city of Tampere, located about two hours by train north -west of Helsinki. The university is one of the most popular in Finland with a student body of about 15,000 and is located near the centre of the city. There are six faculties including Communication Sciences, Education and Management. The university was originally founded in Helsinki in 1925 and relocated to Tampere in 1960.



Figure 1: University of Tampere

The working environment was quite different to my life at Fukuoka University. Finnish universities are independent corporations under public law and thus are given autonomy over research and education. They are in most part publicly funded but when I talked with people



Figure 2: Art gallery & restaurant in Tampere

it seemed there are also a lot of collaborative projects done with business. On the floor where I shared an office with a local researcher, almost everyone was principally involved with research, supervising graduate students and with a teaching load of perhaps one seminar class a week. Seminars by visiting lecturers, local researchers and post-graduate students were constant and ongoing. People also spent much of their time writing applications and proposals for funding for specific projects, and thus future employment. Projects generally seemed to be of 1 to 3 years duration.

Lastly Tampere city, and indeed Finland, are a wonderful place to live. Tampere city lies on an isthmus between two great lakes and much of the city area is natural forest with walking, running and bicycling paths. The lake water is extraordinarily clear and sweet - and frozen in the winter. The local custom of heating up in the sauna, and then immersing yourself in the frozen lake water for 2 or 3 minutes, then returning to the sauna - was surprisingly invigorating. I would definitely recommend it. The city has a rich working class history, being one of the flash points of the civil war in 1918 that came out of Finland's independence from Russia in 1917. Historic buildings such as the Finlayson Cotton Mills and various churches give character to the area, as well as an energetic crafts, design and art culture. The contemporary music scene features a jazz festival and a rock festival throughout the summer. Family values are respected and supported

by public policy such as limited shopping hours on weekdays and weekends, and the observance of an 8 hour work day.

